

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

三月一日、銀座で写真展「写真は何を語るか」を見た。本橋成一さんの「チェルノブイリ、ナポキンさんからのメッセージ」五枚組の作品が印象に残った。八十三才のナポキンさんがチェルノブイリ原発事故で放射能にもっとも汚染された村に移住を拒否してひとり住み、汚染された乳牛を育て、汚染された大地に蒔いたじゃがいもを食べて、自分が生きることで核にたいする無言の抗議をしている写真である。牛をいたわるように世話をする姿、仕事を終えアコーディオンを弾きながら遠くを見つめる目。誰もいない木造の家。写真を見ているうちに、ナポキンさんと同じように核にたいして無言の抗議をする、遠くを見つめる目をもった男の絵を思いだした。

四年前の八月の暑い日に、安達太良山の登山の帰りに立寄った美術館の壁に、見る者に強い衝撃を与え、忘れることが出来なくなる絵に出会った。その絵は福島県立美術館の常設展示室に飾られている。アメリカの画家ベン・シャーンがビキニ事件を「ラッキー・ドラゴン」シリーズとして描いた十一枚のうちの一枚である。病人の白いベットの腰をおろして遠くを見つめる目、髪の毛のなくなった大きな頭、胸は厚いが血管の透けてみえる細い腕と足、男は無言だがメッセージを右手に持っている。

「私は漁師です。名前は久保山愛吉です。一九五四年三月一日、私たちの第五福竜丸はビキニ諸島八〇マイル沖のきのこ雲の下を通りました。私も友人も焼かれました。私たちは何が起ったのか知らなかったのです。その年の九月三日、私は水爆のために死にました。」

作品のタイトルは「ラッキー・ドラゴン」一九六〇年制作、大きさは縦二百四センチ、横百二十二センチで紙にテンペラで描かれている。久保山さんの褐色の肉体に青やピンクの中間色の

## 平和へのメッセージ

一枚の写真と絵から

永井 明

「自由主義史観」なる歴史認識を歪める新たな手法

根岸 泉

「原爆投下を決定したことは、とうてい人間とはいえない、悪魔の行為であったことは言うまでもありません。そして、同時に、原爆によって殺されたその死も、およそ人間の死とは考えられないようなむごたらしいものでした。」

東京都原爆被害者団体協議会副会長の田川時彦さんは、かつて日本平和教育研究協議会機関誌季刊『平和教育』（第三一〇号・一九八八年夏・明治図書刊）に「人間であることを否定した原爆」についてこうのべています。これまで、広島・長崎両市の原爆資料館やここ「第五福竜丸展示館」を見学した人、そして少なくとも原爆に関する書物に接した人の多くはおよそ「原爆投下正当化論」などは夢想だにしなかったでしょう。

ところが、いま学校教育のなかで「原爆投下は正しかったか」というテーマを教師が設定し、「原爆によって米英の二二三万人の生命が救われた」という「主張」を「資料」として生徒に提示し、「肯定派」と「否定派」に分かれて「討論」（これを「ディベート」という）させる学習が行われていま

一九九五年九月、明治図書から『近現代史』の授業改革——『戦争の授業』のパラダイム転換『東京裁判史観』を超えて——が発行されました。広島・長崎被爆50年という時期に登場してきたことに注目しなければなりません。その中に、ある中学校教諭の「原爆投下は正しかったのか」『チャールズ発言』でのディベート」と題する授業実践が紹介されています。次の文はその「まえがき」の一節です。

「国際化時代における『平和教育』とは、まさにこうした価値観・見解の違いのぶつかりあいである。危険性を避けて通れない時代になってきている。『戦争の悲惨さ』を教えるだけではこの間に答えることはできない。ディベートにより、生徒は『なぜ、アメリカは原爆を投下したのか』『なぜアメリカ人はあれほど悲惨な原爆を正当化するのか』を追求していくことができる。多角的に原爆投下の根本原因を探っていくことができる。」

ここでいう「こうした価値観・見解の違い」とは、原爆投下は「日本人にとって当然『否』と考える問題」をアメリカ人は「原子爆弾投下はやむを得ないが六七％との解答」のことをさしているのです。この授業実践の結果、「原爆投下正当化論」の生徒が一二六人中一人から六九人に増えたと報告されています。

このような授業実践の背景には、最近サンケイ紙上に登場しているいわゆる「自由主義史観」研究会の主張があります。この研究会代表であり『近現代史』の授業改革」編集長でもある東京大学教育学部教授藤岡信勝氏は「戦後の歴史教育、とくに近現代史の最大の問題点は、それが自国の歴史に対する誇りを欠き、未来を展望する知恵と勇気を与えるものでなかった」といい「戦争の悲惨さ」をとりあげることを「心情的平和教育」だと批判してきました。この主張の根拠にあるものは「大東亜戦争美化論」を合理化し、戦争不回避論による軍備拡張肯定につながる考え方と一致するものです。

とくにこの「授業論」の危険な意図は、もともと本来ありえない「造語」「自由主義『史観』」なるものと「ディベート学習」のドッキングです。「ディベート」とは互いの意見を主張しあい、その優劣を競うという一種の「討論ゲーム」です。先の「原爆投下は正しかったのか」の「ディベート学習」は、歴史の真理、真実を求めず、価値を問わないのです。西島有厚福岡大学教授は「教師が歴史研究の諸成果を正しくふまえずに下手に生徒にディベートさせると、その教師の不十分な歴史認識のレベルに生徒を押しとどめ、ゆがめることになりかねない」（『近現代史の真実は何か』大月書店一九九六年一月刊）と指摘しています。

「自由主義史観」の名のもとで「人間の死とは考えられないようなむごたらしい悪魔の行為」を「歴史ディベート学習」の対象にし、「歴史認識」を企める新たな手法が教室のなかに入りつつある危険性を感じざるをえません。

(歴史教育者協議会副委員長)

## 「自由主義史観」なる歴史認識を歪める新たな手法

根岸 泉

論による軍備拡張肯定につながる考え方と一致するものです。

とくにこの「授業論」の危険な意図は、もともと本来ありえない「造語」「自由主義『史観』」なるものと「ディベート学習」のドッキングです。「ディベート」とは互いの意見を主張しあい、その優劣を競うという一種の「討論ゲーム」です。先の「原爆投下は正しかったのか」の「ディベート学習」は、歴史の真理、真実を求めず、価値を問わないのです。西島有厚福岡大学教授は「教師が歴史研究の諸成果を正しくふまえずに下手に生徒にディベートさせると、その教師の不十分な歴史認識のレベルに生徒を押しとどめ、ゆがめることになりかねない」（『近現代史の真実は何か』大月書店一九九六年一月刊）と指摘しています。

「自由主義史観」の名のもとで「人間の死とは考えられないようなむごたらしい悪魔の行為」を「歴史ディベート学習」の対象にし、「歴史認識」を企める新たな手法が教室のなかに入りつつある危険性を感じざるをえません。

(歴史教育者協議会副委員長)

核兵器と科学者

連載 16

核戦争による人類の破滅を警告

——ラッセル・アインシュタイン宣言の背景と意義(2)——

小川 岩雄

四十一年前、ビキニ水爆実験を契機として、核戦争による人類破滅の危機を訴え、科学者のパグウォッシュ会議を発足させた「ラッセル・アインシュタイン宣言」は、すでに歴史的文書となり、残念ながら原文や全訳の入手どころか、要旨を知ることさえ難しい。

幸い本紙では昨年の八月号で山田英二教授が概要を紹介されているが、この文書の重要性を思い、改めて私なりの要約を試み、宣言の今日的意義を考えてみたい。

宣言は格調の高い純正な英文でおよそ千百語、邦訳で約三千五百字に及ぶかなり長いもので、水爆戦争が人類にもたらす災禍を分かり易く説明し、戦争の廃絶の必要性を切々と訴えている。

その冒頭で宣言は先ず、「人類が直面している悲劇的な状況の下で、私たちは科学者が会議に参集し、大量破壊兵器の発達の結果生じた危険の程度を

評価するとともに、別記のような決議について討議をすべきである。と感じている」と述べ、宣言の動機と目的を端的に提示している。

次に宣言は、署名者の立場を次のように明らかにする。

「いま私たちは、いずれかの国民や、大陸の住民、信条集団などの一員としてではなく、人間として、つまりその存続が疑われているヒトという生物種の一員として発言している」

紛争の絶えない世界、とくに東西間の激しい抗争のさ中ではあるが、このさい誰一人その消滅を望まない人類の一員の立場に立ち返り、特定の勢力だけが喜ぶような言葉はいっさい慎もう、と宣言は呼びかける。

そして宣言は、どうすれば戦争に勝てるかではなく、どうすれば全参戦国に悲惨をもたらす戦争を防げるかを考える新しい考え方を

学ばなければならぬ、と説く。ここで宣言は全文のほぼ1/2を割き、核戦争が招く恐るべき災害の特徴を鮮やかに描き出す。

最大の特徴は、災害が多くの大都市の壊滅だけに終わらず、ビキニ核実験が教えたように、長期間予想以上に広い地域に破壊的な影響をもたらす、という点である。

実際、すでに広島原爆の二千百倍も強力な爆弾の製造が可能であり、そういう爆弾が爆発すると放射性を帯びた大量の微粒子が上空に吹き上げられ、やがて死の灰や死の雨の形で地表に落下する。

「日本の漁民や漁獲物を汚染したのはこのチリだった」と宣言はビキニ事件を引用し、チリの拡散の程度は不明でも、核戦争による人類の破滅の可能性を否定する専門家は無い、と指摘する。

そうすると、私たちは「人類に終止符を打つか、それとも人類が戦争を放棄するか」という「手ごわく、恐ろしく、避けることができない問題」に直面する、と宣言はいう。何しろ「戦争の放棄には国家主権の不愉快な制限を必要とする」のだから。

人々の深刻な現状認識を妨げて

いる最大の原因は多分、「人類」という言葉があまりに抽象的なためであろう、と宣言はいう。誰もがまさか危険が自分や近親に及ぶとは気付かず、現代兵器さえ禁止すればよいのでは、と思う。

宣言はこの期待を「幻想」であると言いつける。平和の時期に水爆不使用についてどんな合意に達しようとしても、いざ戦争となれば両軍ともいち早く水爆の製造を始めると違いないからである。

むろん核兵器放棄の合意は、東西間の緊張の緩和や奇襲核攻撃の恐怖の軽減には役立つから、「第一歩としては歓迎すべきだ」と宣言は評価している。

ここで宣言は改めて人間としての立場から、東西間の問題の解決は絶対に戦争に頼るべきではないと強調し、次の有名な呼び掛けで力強く全体を締めくくっている。

「あなたの人間性を心に留め、他のことを忘れてほしい。もしそうできれば新しい楽園への道が開ける。もしできないなら、あなたの前にあるのは普遍的な死の危険なのである」  
(立教大学名誉教授・協合理事)

いくつかの出会い

被災42周年 96年3・1ビキニデーをめぐる

飯塚 利弘

フランスで  
ビキニを訴えた若者たち  
静岡市職員労働組合連合会青年部の学習会で「3・1ビキニと久保山すすさんの道」について話した。

青年部代表三名は職場や街頭で集めたフランス核実験反対署名四五〇筆を携えてパリへ行き、ピース・アニメ『つるのつて』を創ったミホ・シボさんの援助を得て、署名をフランス政府に届け、平和団体と交流し、3・1ビキニを訴えた。

その報告集会には五〇名余の職員が参加、大成功を収めた。講師として招かれた私は、その熱気と若さとエネルギーを感じた。

96年3・1ビキニデーに静岡市労働から二名が参加した。私の話を聞き、3・1ビキニデーに参加したある青年は目を輝かせて語った。「俺は焼津の隣の用宗に住んでいるのに、こんな事実があったなんて知らなかった。全国の青年が焼津に集まってきていたのに、俺は今までなにをしていなかったんだ。」

青年部はこれからレクリエーションはやめて、平和運動だけにしようぜ」。

静岡市労働では春闘勝利のためのニュースを毎日発行した。それには「フランス核実験反対から3・1ビキニデーへ」という記事が毎号連載されていた。

久保山愛吉さんはハイカラさん 96生協3・1ビキニデー虹のひろばでかつて久保山愛吉さんが妹のように可愛がっていた姪の鈴木みねさん(愛吉さんの長兄幸太郎さんの長女)と対談した。

みねさんはとても話上手で、会場の人びとを爆笑させながら若き日の久保山愛吉さんを見事に「裸」にしてしまった。船元の四男坊だった愛吉さんはとてもハイカラさんで、アイロンをかけしわひとつないワイシャツしか着なかった。新しいもの・珍しいものを好み、高価な蓄音機やレコード、色鮮やかな熱帯魚など買い求めてはみねさんらを喜ばせた。当時、個人でそうしたものを買うひとはいなかった。たので「一風変わった人」だとも

がした。

第五福竜丸よ、

三月一日、久しぶりに第五福竜丸展示館を訪れた。愛吉碑の横に「愛吉・すすのバラ」が冷たい潮風に耐えてじっと春を待っていた。

三尾さんに案内していただき、かつてここを訪れたすすさんがそうしたように船内をじっくりと見学した。展示館に凍として立つ第五福竜丸は焼津港に係留されていた第五福竜丸よりはるかに大きく見えた。胸を張っているようだった。

私が訪れる少し前に、焼津市浜当日や岡当日の人たちが第五福竜丸を見学したという。すすさんが知ったら「やあー私らん近所のしゅうが福竜丸を見にいってくれたのかね、うれしいよう」と喜ぶことだろう。私は第五福竜丸に、「こんど『パンフィック・オーシャン』の道」という本を出版しました。その第五章で「焼津に生きる第五福竜丸」のことを書きましたよ、いつまでもいつまでも『平和の船』として焼津市民の心に生きつづけてください」と語りかけた。  
(元焼津中学校教員・協会評議員)